

■（３９）被災地の先生も発想の転換です！

小中高校の最高学年になると、一つ一つの学校行事がすべて重要な意味を持ち、いつまでも思い出となる。数十年前、遠足や運動会の日には雨が降ると悲しい気持ちになり、持ってきた弁当とお菓子を教室で、給食の代わりに食べたものだった。

被災地ではようやく再開できた学校も、とても行事まではできない状況が続く。春に多い修学旅行の中止や秋への延期。運動会も秋に先送りする例が絶えない。そんななか、ある小学校の先生は発想を変えた。「できない、できない、より、何ができるか考えよう」。本来は秋に予定された遠足を前倒しするはずだった。そこに米国から応援メッセージつきのリュックサックが届いた。子どもたちは大喜びだ。ただ、先生たちは子どもたちの心にも配慮した。いつもなら高学年は市街地を見渡せる山に登るが、がれきの町をみせるのは忍びないと目的地を変えた。子どもたちも大きくなったら、その心遣いを知ることになるだろう。

放射線に悩む福島でも同じです。特に子どもたちの未来のために、自分らは何ができるのだろうか。被災地から報道する側にとっては、最も重いテーマです。（山）